

佳作

迷ったときは前に出ろ 福島県いわき市立平第一中学校 3年 鈴木 玲王奈

更新されたホームページの、結果速報のページを開く。タブレットの画面に浮かんだのは「銀賞」の二文字。悔しさよりも何よりも先に、強い虚無感に襲われた。この日は朝からなんだかおかしかった。前日にとっても良い演奏ができたのに、私を含めた皆がまるで抜け殻のようだった。嫌な予感がし、なんとか雰囲気を変えようとした「つもり」だったが、結局は何も変えることができなかった。せっかく部員全員で掴んだ県大会、それがこんな形で終わってしまうなんて。私のせいだと何度も自分を責めたが、終わってしまったからでは遅すぎるということを改めて思い知った瞬間だった。

私は2年生の夏から、推薦により吹奏楽部の部長を務めることになった。以前も何かのリーダーや代表を務める機会があったが、自分が人数の多い部をしっかり率いていけるか大きな不安でいっぱいだった。それでもあのときの私は、選んでくれた皆のために精いっぱい頑張ることに決めたのだ。

しかし、それからというもの、私は周囲に迷惑ばかりをかけてしまった。あるときは所属している生徒会の仕事に追われ、あるときは体調不良によって、いつのまにか大切な部活がおろそかになってしまっていたのだ。自分でもそれはよく理解しており、私がしっかりしなければといつものごとく思うのだが、思うように体がついていかず、とても苦しい日々が続いた。

いつからか私は原因不明の体調不良に悩まされている。常に起き上がれないほどの強い倦怠感や胸の痛みがあり、学校から帰宅すると勉強も翌日の準備も手につかず、ついには学校の授業ですら起きていられないほどになった。そんな生活を1年以上も続ければ、もちろん生活に支障をきたす。成績が下がり始めたことを皮切りに、徹夜で勉強→生活リズムが崩れる→体調が悪化する→課題がたまる→徹夜という負の連鎖を断ち切れなくなり、何もかもが嫌になって心も体も壊れ始めた。

こんな私にも、決めたことは最後までやり抜く、という気持ちくらいはあった。苦しくても極力明るく振る舞い、どんなに体調が悪くても学校を休むことはなかった。部活にも参加した。しかし、そのことだけで満足してしまっていた自分がいたのかもしれない。自分は頑張っているという「つもり」だけ、私にはもうどうしようもないという諦めだけで、少しでも自分を変えようとする努力をしていなかった。自分が変わるのではなく、周囲の何かが変わることを

待っていたのだ。結局私は、部長という肩書だけで、部に何も貢献できなかったように思う。あっけない最後を迎えるまで、自分に重くのしかかる責任から逃げ続け、その代償として苦く悔しい思いを背負うことになってしまった。

最近、母に「あなたには無意識に嫌なことを避けようとする癖がある。やればできることをやらないのはもったいない」と言われた。少しむっとしたが、何も言い返せなかった。この言葉を受け、私は何から逃げていたのだろうと考えたとき、初めに思い浮かんだのは「楽しさ」だった。部活の楽しさ、勉強の楽しさ、他にもたくさんある。辞めてしまったピアノに替わり、純粹に音楽を楽しみたいという気持ち。上達して皆と良い音楽を奏でたいという気持ち。それらの気持ちの全ては、初めの頃の私の希望に満ちた気持ちであり、私はずっと、その頃の眩しい自分から逃げていたということに気づいたのだ。

また、他人を気にしすぎる自分がいることにも気づいた。あまり流されるタイプではないのだが、何をするにも周囲の気持ちや状況を気にしすぎるあまり、自分の行動に必要以上にブレーキをかけてしまう。今思えば、部活で何かを指示するときも、友人を頼りにしてばかりで自信のない指示になってしまっていた。

改めて、自分を良くするのも悪くするのも自分自身なのだと思わされた。自信の有無なんて関係なく、意志を強く持って引っ張る私になるべきだった。他人に委ねるのではなく、自らを省みて、自分の価値は自分で決めなければならなかった。

「迷ったときは前に出る。」この言葉は、今年から私が座右の銘にしている言葉だ。私はもう、後悔ばかりの私ではいたくない。いつでも自分を高められる最高の私でいたい。どんなことでも、やるかやらないかで迷ったときに常に前に踏み出す私でいたい。誰かが一緒でないと何もできない自分ではなく、私は私らしい個性を誇りに思える私でいたい。

今後もたくさん迷い、悩みに悩みながら成長していくであろう私へ。頑張り続けるのが嫌になっても、諦めそうになっても、どんなにつらいときも、逃げずに必ず前に出る。